
恋せずにいられない - - こゝろによせて

あくた咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋せずにいられない - ころによせて

【Nコード】

N6538Y

【作者名】

あくた咲希

【あらすじ】

日本産の吸血鬼、石見佐久也は現在男子高校生をやっている。そこへ、教育実習にきた笹倉みい子。彼女は佐久也の好みのストライクゾーンど真ん中だったのだが、吸血するには条件があつて……？

(連載全10回)

十七歳以下の女性が望ましい。なお、処女か否かは問わない。できれば、美しいほうがいい。

我が糧は人間の血。でも 現代は吸血鬼には少々、生きにくい時代。

第一話 はじまりは教育実習

十七歳以下の女性が望ましい。これはドクターにも忠告されたこと。MAXステータス（記憶力や運動能力などの最高値）を維持するため、吸血対象を十七歳以下に限る。性別についての指示はなかったが断固として女がいい。なお、処女か否かは問わない。そういう経験のあるなしで味はそう変わらない。かえってコクが出るのだと美血家は言うとか言わないとか。そして、できれば美しいほうがいい。欲は言わないが首筋は美しくあつてほしい。

俺、ヴァンパイア。日本生まれの吸血鬼。

我が糧は人間の血。人間の食べ物は胃腸が受けつけてくれない。だから、自分好みの美人の生き血が唯一のグルメである。この現代においてサラサラ血の美人に遭遇すること、それは希有だ。二つの条件をクリアしている上に、必要最低条件である十七歳以下の女性となると、もう。吸血鬼は基本的に不死だが時の過ぎる速さは人間と同じ、一日に三度は腹がへる。背に腹はかえられないから、グルメとはほど遠い吸血生活を送ってきたぜコンチクショウ。

そんな俺とは対照的に、けして妥協しないヤツもいた。俺とは年齢が近く、百年あたり前までつるんでいた悪友の太一である。それが 去年の夏のことだ。炎天下の運動会の開会式で倒れ、人間の

病院に入院した。点滴は吸血鬼にも有効らしいが、それだけでは間に合わず先月とうとう骨と皮だけになって死んだ。老夫婦の養子として人間社会にもぐりこんでいたそいつは人間と同じように火葬され、人間の墓地の一角に眠っている。看取ってやれなかったが葬式に参列した俺に、養父は一冊の文庫を差し出した。

悪友の死は、吸血鬼社会の役所が発行する公報グローバル版にもでかでかと掲載された。『One young vampire died of hunger! (若き吸血鬼、飢餓で死亡!)』

以来、公報の枠外には「贅沢は敵」だとか「モツタイナイ」だとか、そんなキャッチコピーが躍るようになった。

今日も俺は校舎の屋上で、昼休みを一人で過ごしていた。梅雨の晴れ間の日差しはやけにばかばかだ。俺、何回目の高校生だろう。学生をやりはじめたのは明治の頃だったか、悪友とともに下宿を借りて日夜、人間の若者と議論を交わしてみたりしたものだ。あの頃とはうってかわってフランクになった学生生活も、これはこれでもいいものである。共学が一般的になって女の子とも出会いやすくなったし。ただ、ここにきて男子高に入学してしまうなんて……。いくらなんでも男の血を吸う気にはなれないっての。転校という手も考えたが、人間社会で戸籍を持たない身としてはそれも難しい。そこんとこをうまくやってくれる吸血鬼社会の役人が活動するのは春先だけで、現在は休業中。しばらくは偶然の出会いに賭けるしかない。吸血行為に及ぶには、多少は親しくなってからでないと無理だから。今の時代、うかつに吸血しようとするとは即犯罪者だ。婦女暴行。住居不法侵入。捕まった仲間の噂もちらほら聞く。俺はため息をついて日陰に移動した。ネクタイを緩めてコンクリに寝ころぶ。なんの変哲もないスニーカーを脱ぎ捨てた足を適当に組むと、グレーの膝小僧が視界に入る。数日ぶんの空腹を紛らわすために、ひと眠りすることにする。

「こらーっ！ こんなとこで何してるっ？」

頭上からの声に、反射的に跳び起きた。

「とつくに授業はじまつてるんだからねっ」

女の声。教師陣までむさ苦しい男揃いな男子高に、女の声！逆光に目を細めながら凝視すると、スーツに身を包んだ小柄な女が仁王立ちをしているではないか。セミロングの髪が屋上の風になびいている。薄ピンクの指先で、俺の曲がったネクタイをキュツと締める。

「勝村先生が問題児って言うてたの本当だったんだ。全校朝礼、出てなかったでしょ。教育実習生がくることも知らなかったでしょ」

「……は。教育実習生？」

というからには、大学生だろう。現役で進学したとしても二十一歳か、二十二歳のはず。それがどう見てもこの女は高校生だ。身長が一八〇超ある俺より小さいのは当然としても、幼い。

「ほんとに大学生？」

ぼろりと疑問を口にすると、女は、丸っこい顔にカーツと血をのぼらせた。

（あ、旨そう）

いや違う、

（あ、やばい）

と身を引いたが、時すでに遅く。

「何よ！ 童顔なのは生まれつきよ！ みんな初対面でひどいよ！」などと吠えかかってきた。うん、童顔ってだけの問題じゃないと思う。めっちゃめっちゃ声が高いし、反応が単純。だから俺は、小さな女の子にするように頭をくしゃっと撫でてしまった。

「ごめんごめん、悪かったな、あ」

教育実習生はくりくりした目にみるみるうちに涙をためて、でも必死に唇を噛んで、我慢して。ぷるぷるときゃしゃな全身を震わせた。こりゃ実習期間中マスコット決定だな。

（ついでに……まじ旨そう）

腹がキュンと鳴った。しかし十七歳以下でないとダメだ。難儀な

もので、吸血鬼は年寄りの血を吸うと老化してしまう。これは何も吸血鬼に限ったことではなく、いつだかどこだかの実験でも、若マウスの血を注入された老マウスは回復力が増し肝機能が活性化し、逆は衰えたという。そんなメカニズムで、健やかに生きてゆくには人間の若い血が必要なのである。

吸血鬼の子どもは、生まれて三年ぐらいで乳離れをする。俺だつてもものごころつく頃にはすでに・・狩りをしていた。体の成長が一段落する頃、つい、年上の女が魅力的に見えちまったりして。いつかの戦乱の世だったかな、合戦の跡地をうろついていた俺を拾ってくれた女の血を吸ったとき、ひどい二日酔いをしたのだ。ああ俺これが限界だ、吸血するなら若い子にしよう、と。その頃ちようどドクターからのお達しもあった。さて

「俺、教室に戻るけど。センサーはどうする。そんなんじゃ戻れないっしょ？」

ぼろぼろ涙をこぼしはじめた実習生を見おろして、俺は頭をかい

た。

「あー。だから、泣きやんで。な？」

抱き寄せて、背中をさすってやる。実習生は俺にしがみつき、わあんと声を上げて泣きはじめた。こんなんで先生をやっていいのか？……心配だ。

「二時半か。六限は国語だったな。センサーって国語教師志望？」

「ぐすつ、英語。勝村先生が指導してくれてるんだ」

「なんだ、担任の使いっ走りか」

おおかた国語のヒステリック禿げジジイからヘルプを求められ、担任の勝村のやつ、自分じゃ面倒だから実習生を仕向けたってことだな。

「今はまだいいが、本当の先生になったら生徒の前でこんな、泣いたりとかしちやダメよ？」

「冗談めかして言うつと、実習生はキョトンと顔を上げて、まじまじと俺の顔を見つめた。まるっこい子どもみたいな目。もしかすると

血液の年齢も若いかもしれん。

わきあがつてくる吸血欲求を必死に抑えている前で、センサーは目をしばたいてから頷いた。

「石見くんて、意外にいいコね」

スーツの袖から覗いたブラウスで涙を拭い、にこつと笑う。教育実習ってことは、これから二週間この学校で過ごすわけか。大丈夫なのか？ どちらかというとチャライ高校だぞ。聞けば母校の抽選にもれたとかで、兄貴がかつて世話になったというこの高校に受け入れてもらったらしい。兄貴は、やめとけと止めたらしいけど。(チャラ高出身者にしては正しいぞ兄貴。)

「家から通える範囲でないと困るし、教員免許ほしいから。都会に出て、一人暮らしするの」

俺を連れ戻すという任務を忘れた様子で夢を語るセンサーは、どう見繕つても世間知らずのお嬢ちゃんだった。現実をすつとばして夢ばっか見てる。こんなんでも二週間、耐えられるのか。

(……なんとかフォローしてやるか)

幸い俺は問題児で、ケンカも強いと評判だ。このコの授業で騒ぐ奴がいたらシメてやるか。

「じゃ。センサー、職員室、ちゃんと戻れる？ 化粧、直してから行けよ」

「うん。あつ、そんなにひどい？」

「マスカラがちょつと落ちた程度かな」

センサーは慌てて、胸ポケットから折りたたみミラーを出して確認した。

「あー、やだ。せつかくうまく出来たのに」

地団駄らしきものを踏んでから、階段につづくドアを開ける。

「先生、先に戻るから。石見^{いわみ}くんも早く教室戻るんだよー」

手を振ると、鉄筋の階段を降りていった。

「甘い。詰めが甘い」

ヤンキー座りをしたところで思い直した。

彼女のために、ジジイのわめく教室に戻ることになりますか、つと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6538y/>

恋せずにいられない - - こゝろによせて

2011年11月27日10時02分発行